



住民と自然の 共存を 目指した まちづくり

沖縄本島の最北端に位置し、**やんばる**の**中核を占める国頭村**。ヤンバルクイナをはじめ、多くの固有種が生息する土地として知られる。そこで実践されているのは、**地元を愛する住民たちによる環境保全**。その取り組みは、JICAの研修員たちの心に響いたようだ。



国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」を訪れた研修員たち。同施設では、ガイド付きのハイキングやカヌーなどの体験プログラムを用意し、「遊び」を通じた環境教育を実践している

人材育成を通じて、 村の自然を守る

那覇市内から北上すること車で約3時間半。人口約5700人を有する国頭村には、今もなお、手付かずの自然があふれている。しかし近年、見えないところで、確実に生態系の破壊が進んでいるという。そんな中、2002年に発足したのが国頭ツーリズム協会（KUTA）。住民が主体となり、地域に根差した環境保全を推進している。

08年5月末、JICA沖縄の集団研修「熱帯・亜熱帯地域におけるエコツーリズム企画・運営」の研修員9人が、国頭村環境教育センター「やんばる学びの森」を訪れた。中南米、アフリカ、アジアなど、自国の省庁やNGOで環境政策に携わる彼らは、2日間にわたって、KUTAが取り組む環境保全、エコツーリズムについて学んだ。

やんばる学びの森は、日本で唯一の村営の環境教育施設。米軍から返還された訓練場跡地を利用し、07年4月にオープンした。研修員たちは、

沖縄本島・名護市から北部一帯の地域を指す。手付かずの豊かな自然が残り、生物多様性の優れるエリアとして注目される。

まず施設内の森を散策。1時間ほど歩いただけで、オキナワキノボリトカゲなど20以上の生物を見つけることができた。「自分の足を使って、自然について学ぶ」プログラムとして、通常は小学校高学年の児童を対象に実施されているものだ。

KUTA代表の山川安雄さんは、「まずは、地域の資源を正しく理解することが重要」と強調する。KUTAは地域づくりに主体的に参画できる人材を育成するため、人材育成講座を開講。「持続可能なツーリズム」をテーマに、年20回、講義や実習を行っている。修了生の中には、「国頭の案内人」として、村内の宿泊施設やNGO、役場などで地域振興に貢献し



森の中で見つけた生物を記録する研修員たち。身近な生物からライフサイクルを学ぶアイデアは、大いに役立ったようだ



研修員は、夜の森を散策する「ナイトハイク」を体験。「昼と夜では遭遇する生物も違う。暗闇の中から聞こえてくるさまざまな音から、森の豊かさを感じてほしい」と久高さん



国頭村では、森の中に赤外線センサーのカメラを設置し、生物の種類や数を調査している。「自国で活用したい」と、研修員たちは久高さんの説明に真剣に耳を傾けていた

ている人も多い。国頭村には、「住民の手によって自然を守る」という精神が徐々に根付いてきている。

国頭の自然を撮り続ける写真家・久高将和さんは、KUTAの顧問として、人材育成講座の講師を務める。「利益を追及することよりも、まずは自然を守ることが大切。『ツーリズム』は、その後についてくる手段の一つにすぎない」と話す。

パートナーシップにより 地域の活性化を目指す

「持続的な環境保全を達成するためには、村内でのパートナーシップが必要」と言う山川さん。KUTAは、

07年に「やんばる国頭の自然を守り活かす連絡協議会（CCV）」を設立。村役場や商工会、NGOなどが一体となり、各組織の強みを生かした環境保全を目指す。代表者は定期的にミーティングを開き、地域の問題やその対策について議論している。

西アフリカ・ガンビアの研修員、アブバカル・カマラさんは「自治体と住民が連携して、一つ一つの問題に取り組み姿勢は素晴らしい。ぜひ参考にしたい」と話す。人材育成に力を入れるKUTAの取り組みに感銘したというのは、バンングラデシユの研修員、ジアル・ハークさん。「KUTAの活動を通じて、地域振興を推進するために必要なものが見えた

ような気がする」。

国頭村がJICA沖縄のエコツーリズム研修の見学を受け入れるのは3年目。山川さんは、「日本の一地域として、開発途上国と共有する問題も多い。研修員との議論を通じて、私たちも刺激になるし、学ぶことがたくさんある」と語る。

最後に「国や地域によって、それぞれいいところは違う。その土地に合った方法を考えることが大切」という久高さんの言葉に、研修員たちは大きくうなずいていた。

地域に対する誇りを持つことから生まれる環境保全とエコツーリズム。国頭村の精神は、これから多くの途上国に広がっていくに違いない。